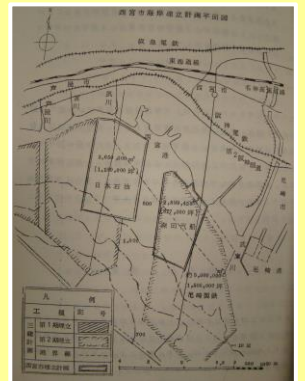


# 西宮日石コンビナート建設反対運動における住民アセス

～西宮市のまちづくりの方向を決めた学習と対話～

## ■経緯

西宮市は1960年、日本石油を核としたコンビナート誘致を打ち出した。当初「条件付き賛成」だった酒造業者らが反対に転じ、その論拠とした事由書を手に学習と対話を広げ、広範な市民による反対運動となった。一方、西宮市は学術報告書を得て事態の好転を試みたが、62年9月、日本石油が白紙撤回を表明し、混迷に終止符が打たれた。その直後の市長選で建設反対派候補が当選し、「西宮市文教住宅都市宣言」が議会で採択され（63年9月）、今日に継承されている。そうした地域づくりの方向性は事由書にも見出される。西宮現代史の一大事件として位置づけられている。



開発予定地（事由書より）

## ■西宮市埋立予定地に石油化学工場誘致反対に関する事由書（1961年10月）



公益財団法人辰馬考古資料館所蔵  
(2017.5.18 傘木撮影)

酒造業者らが反対陳情書に添えた事由書は、保存されている白鷹資料の各所に添付されていることから、学習と対話の「武器」となっていたことが伺える。大学で醸造学等を学んだ酒造会社の職員がまとめたこととされ、「この頃ようやく緒についた環境汚染研究の最新の成果を吸収、利用したものであり、環境汚染にかかわる、戦後の日本で最初の本格的な陳情書・事由書であった」（平野2008）。その内容を見ると、石油化学工業の作業工程や立地に伴う要因分析からはじまって、各方面の学術論文や統計資料等を駆使して、酒造業や市民生活に想定される影響を、全22頁で簡潔に書かれている。

## ■学術調査報告書への市民意見

西宮市が、庄司光（京都大学教授・当時）らに委託して実施した学術調査報告書（61年12月）に対して、隣の芦屋市「市民大会」の宣言（62年1月）は、「公害等をはじめ殆どすべての問題点が、前提条件が満たされる限りにおいて、解消するものであるとの内容であることを承知しております。然るにそれが満たされる保証は今日未だ何人も為し得ない」と、その本質を見据えた意見を表明している。



西宮市所蔵の学術調査報告書3分冊  
(2017.5.18 傘木撮影)

## 提案

従来、三島・沼津コンビナート建設をめぐる松村調査団（三島市委嘱、1964年5月）と黒川調査団（通産省委嘱、同年7月）の報告書とそれをめぐる論争の経緯が「日本の環境アセスメントの原点」とされてきた<sup>※1</sup>。私は、西宮事例がこれに先んじていると考え、環境アセスメント史に位置付けることを提案する。少なくとも事由書とそれを活用した取組みは住民アセス<sup>※2</sup>の第1号である。また、アセス法20年を機に、環境アセスメント史という研究テーマが構築されていくことを願いたい。

※1：原科幸彦『環境アセスメントとは何か』（岩波新書、2011年）55頁。橋本道夫『私史 環境行政』（朝日新聞社、1988年）（68頁）

※2：開発事業を想定して、住民等が、住民参加型の調査学習活動を行い、当該事業がもたらす影響と対策等を検討する行為